

発想の転換

永山 親雄



発想の転換——よく耳にする言葉であるが、どうしてどうして実行がむずかしく、苦勞の種子でもある。

二十年にもなろうか。わが家を新築せんものと、友人の住まいをいくつも見せてもらったことがある。図面を書くことの好きな私で、友人たちの建築に当たっても、幾度となく相談を受けた。きたのに、いざ自分のこととなるとうまくいかない。いろいろと思いをめぐらせて、十枚の余も平面図を書いてみるが、どうも最初の間取りが頭から離れないのである。大同小異、ついに会心の作が生まれぬままに建ったのが、実は今の住まいなのである。

その後、何の因果か、校長住宅や学校建築にしばしば出会うことになった。そこで考えさせられたことがある。設計家はそれが仕事とはいえ、全く違ったものを設計し、造っていくのだから

ら恐れ入る。どのようにして「発想の転換」をしているのだろうか、見えざる努力はさておき、不思議にさえ思い、敬意を払っている。

毎日の仕事の中で、教職のプロとして、転換をしなくてはならないこと、あるいは、転換を要求されることがあるわけだが、思うようにできないでいる。

ところが、このように進めたらどうだろう、この点についてはこう考えては……となり、何とかうまく済んで、転換とまではいなくても、少しづついろいろな角度からの話が出されて、よいものにできあがっている。そう深く考えもしないままに過ぎてしまっているのである。一人立ちできないプロなどいいはずであるが、なんともありがたい気持ちとすまない気持ちとが同居していて、すっきりとしない。転換を計るためには、それなりの素地がなければできないと思う。その素地を築く努力や苦勞もしないで、すばらしいものを望むのは所詮無理なことである。思うに、自分の発想を、金科玉条とまでは思っていないと、自分の殻を打ち破ることができないか、それとも忙しさを盾に、その努力を怠り、集団の中に甘えているのかもしれない。

やがて忘年会がやってくる。いつの年であったか、その席で「すべてを忘れ、この期に頭の中を0(ゼロ)にする努力をしてみてもどうだろ

う」と言ったことを覚えていた。『ゼロにしなければ、新たな発想は生まれてこないのではないか……』と、実は無理ではあるが、自分に言い聞かせたかったからである。

今年はその時期に、なにが浮かんでくるか、なにを自分に言い聞かせるか、いつものことながら、楽しみと不安とが錯綜してくるのである。

(棚倉町立棚倉中学校長)

信じた

子どもの心

渋佐 多恵子



「先生、おれがキダったなあ」

A君から一通の封書が届きました。整然と並んだ横書きの文字に、ユーモアを交じえたカット。高校入試の合格と近況を知らせる二枚の明るい手紙でした。冒頭の文は、その手紙の初めに、書き込まれていたのです。何日か前に私の家の前を通りかかったとき、「手紙書くね」と一言話していった恥ずか

しそうな彼の笑顔が脳裏に浮かびました。

当時小学三年生であったA君を担任していたその年、私は育児のために、一年間の育児休業をとりました。

「一生の間で一番大切な一年間。せめてその期間だけでも母親業に専念したい」と考えたからです。

ところが、そんな気持ちなどクラスの子どもたちが知るよしもありません。その上不幸にも、一年の間に補充の先生が三人も変わってしまったのです。

育児休業が終わり、母親から先生にもどった私を待っていたのは、一人の男の子の反抗でした。

「お前なんか、帰れ」

「一年間もおれたちをほったらかしにして」

指名しても答えない。一緒に活動をしたくない。かといって、無視されればよいけい反抗的になってくるのでした。

私は待ちました。その子の心が和むのを。たとえ、返事が返って来なくても、話しかけてあげました。時には、両手を握って、私の心を伝えました。

「A君が、先生を嫌いでもいいよ。先生は、A君が好き。嫌いなならないよ」いつも、笑顔返すことを心がけながら、信じていました。温かい愛で包んでやれば、かたくなな心もいつの日か解けることを願って……。